



(清水・静岡)

本遺跡は、静岡平野の北東部、長尾川の扇状地の末端に広がる自然堤防・後背湿地の発達した低地地形上に立地する。標高は一一～一二mを測る。現在の長尾川本流は、遺跡付近では天井川となり五～六mもの高さの堤防が築かれており、ここを境に西側は川合遺跡、東側は瀬名遺跡と区分されている。川合遺跡は弥生時代～古墳時代・平安時代の集落・墓域・水田などが発

静岡・瀬名遺跡(一〇区)

- 1 所在地 静岡市瀬名字柳原
- 2 調査期間 一九八九年(平一)二月～一九九〇年七月
- 3 発掘機関 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 4 調査担当者 守谷孝治・小林孝誌
- 5 遺跡の種類 水田跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～平安時代、近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

見されるときともに、平安時代の掘立柱建物群がまとまって発見され、官衙遺構(推定安倍郡家)と考えられている。

瀬名遺跡の発掘は、静岡バイパス建設工事に伴うもので、一九八六～一九九〇年の五カ年間現地調査し、現在は資料整理中である。幅約六〇m、延長約九〇〇mの調査対象地を現道路を境に一〇区画に区分した。地表面からの深さ約六mまでの間に、弥生時代中期～近世までの度重なる洪水により埋没した水田遺構を主体に、各調査区八～一六面の遺構が検出された。延べ調査面積は約一六万㎡におよぶ。東海地方では古い段階に属する弥生中期の水田跡、方形周溝墓、弥生後期の掘立柱建物・栗林・水田・準構造船、古墳・奈良時代の水田・人形や斎串を伴う祭祀遺構、「五百原」「西奈」の地名のみえる木簡(『木簡研究』一一)、平安時代以降の条里型水田・掘立柱建物・緑釉陶器・墨書土器などが発見されている。

瀬名遺跡一〇区からは、水田が一五面とピット状遺構一面が検出された。平安時代の条里型水田は、一〇区では調査区の範囲が坪の中に入ってしまったため、坪界線の位置からははずれているが、条里型水田の範疇におさまる区画が一四a層・一四b層・一六層・一九層と四面検出された。木簡が出土したのは上下を水田に挟まれた一五層(粘質砂層)の上面である。文字面が下になった状態で出土した。一五層は洪水により堆積した土層であり、木簡は上流から流されてきたものと考えられる。

川合遺跡は旧川合村であり安倍郡に属するが、瀬名遺跡の所屬する旧瀬名村は廬原郡に属する。ところが瀬名遺跡九区からは、平安時代の旧長尾川と考えられる埋没河道が発見されており、この河道が安倍・廬原の郡境であったとすれば、木簡の出土した瀬名遺跡一〇区は安倍郡に属するらしい。

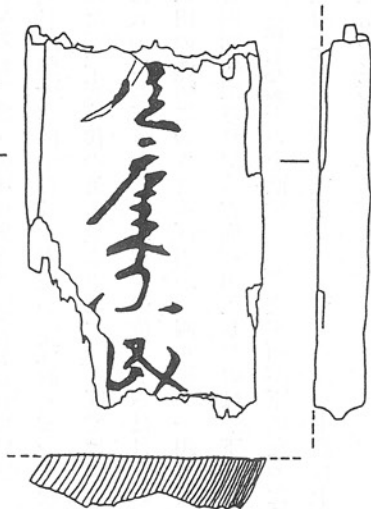
8 木簡の积文・内容

(1) □戸主奈□

(73) × (44) × (10) 081

木簡は、文字のある表面だけが残存しており、左右は年輪面で剝離し、上下端も折損、裏面も剝離している。表面は柃目を丁寧に削り仕上げられている。断面を観察すると厚手の追柃目板である。表面に五文字みられるが、一字目は上端が折損しているため积読が難しい。二字目と三字目を「戸主」とすると、一字目は「郷」とも考えられる（向坂鋼二氏教示）。一字目を「屋」と解釈し、二字目と三字目を判読不明の一字とする解釈もある（原秀三郎氏教示）。四字目は「奈」と読め、五字目は「成」あるいは「戊」などの読み方が考えられる。通常、戸主の下には人名がくると思われるが、確定できない。「戸主」の用例は平安時代初め頃までであり、書体から考えてもこの木簡の年代観は、平安時代前期頃までのものと思われる。

なお、积読については静岡大学原秀三郎氏、浜松市博物館向坂鋼二氏のご指導をうけた。



9 関係文献

静岡県埋蔵文化財調査研究所『瀬名遺跡 平成元年～二年度発掘調査概報』Ⅳ遺構の概要6・一〇区（一九九一年）

栗野克巳「静岡・瀬名遺跡」『木簡研究』一一（一九八九年）

「瀬名遺跡最近発見の文字資料」（静岡県埋蔵文化財調査研究所『研究所報』二五 一九九〇年）

原秀三郎・山中敏史「静岡県古代史料 追補一」（静岡県教育委員会文化課県史編さん室編『静岡県史研究』六 一九九〇年）

（栗野克巳）